一七世紀初頭のケントにおけるトゥック家の農業経営

吉田　弘

一　はじめに
二　経営の背景
三　『帳簿』からみた経営
　a　経営地の存在形態
　b　穀物生産
　c　牧畜・酪農
　d　むすび

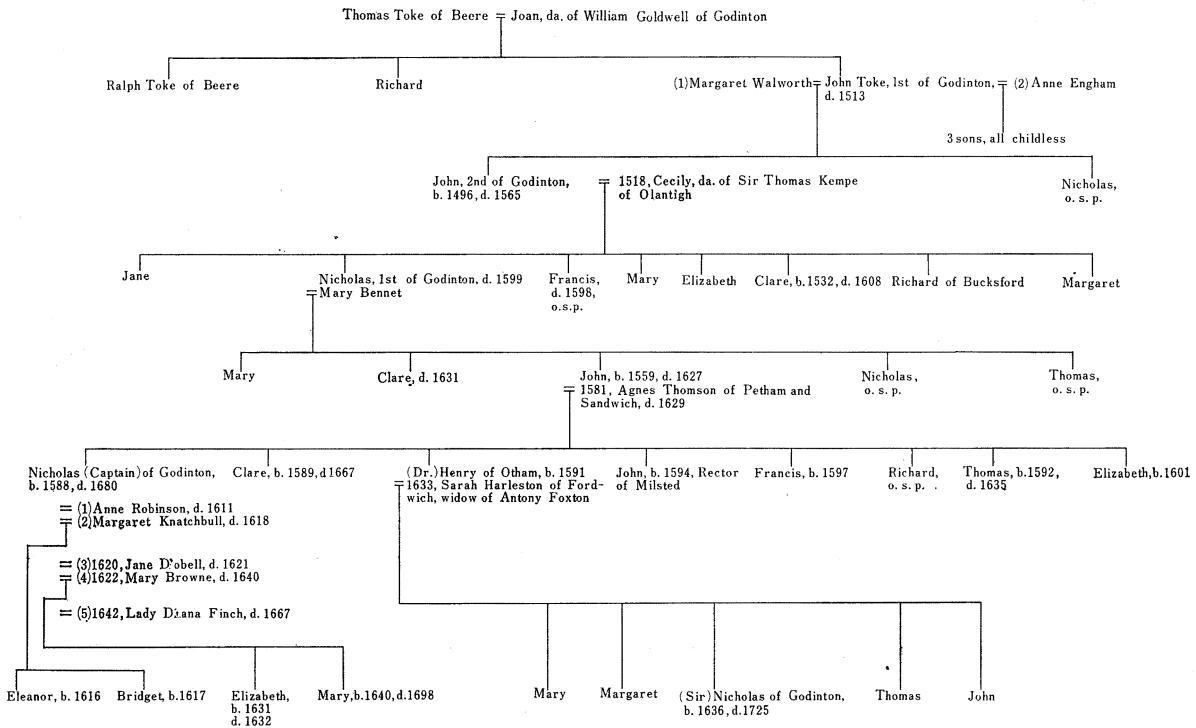
一　はじめに

ガヴェルカインド（Gavelkind）[1]と呼ばれる土地保有態様に関する慣習が広く行なわれていたことで有名なケントは、首都ロンドンに隣接すると同時に大陸にも最短距離にあるという地理的特徴を有していたのみならず、サクソン

期以来農村の中産層（rural middle class）の広範な存在によっても特徴づけられてきた。[2] このようにイングランドの中でも特異な位置を占めるケントにおいて市民革命直前にあたる一七世紀初頭に営まれていた農業経営の実態を解明することが本稿の課題である。本稿で分析の対象とするのは、一六一六年から一六三〇年に至る期間におけるトゥック家の農業経営であるが、[3] まずトゥック家の歴史を概観することから始めよう（第一図参照）。

トゥック家はウィリアム一世の時代にまで遡ることのできる由緒ある家柄で、ケントのビーア（Beere）に定着した。[4] そしてヘンリー六世の時代に、トマス（Thomas Toke of Beere）がウィリアム・ゴウルドウェル（William Goldwell of Godinton）の娘で女相続人であるジョーン（Joan of Goldwell and Godinton）と結婚することによって、ゴディントン・エステイト（Godinton Estate）がトゥック家の所有に帰した。トマスとジョーンとの間には成人した（surviving）二人の息子があり、ラルフ（Ralph）がビーアにあるエステイトを相続し、ジョン（John）がゴディントンにあるエステイトを相続した。ゴディントン・エステイトは、ジョンの後ジョン（John, 2nd of Godinton, 1496—1565）、ニコラス（Nicholas, 1st of Godinton, ?—1599）の手を経て、一七世紀初頭にはジョン（John, 1559—1627）が所有していた。ジョンは、一五八一年にアグネス・トムスン（Agnes Thomson of Petham and Sandwich, ?—1629）と結婚して、長男で相続人となったニコラス（Nicholas, Captain, of Godinton, 1588—1680）を含めて息子六人、娘二人をもうけた。ニコラスは、一六一六年以後父ジョンに代わって農業経営を行なっており、父ジョンの死（一六二七年四月）後ゴディントン・エステイトを相続した。[5] またニコラスは、母アグネスの死（一六二九年）後彼女に属していたミルステッド（Milsted）とトング（Tong）とにある土地をも相続した。[6] ニコラスは、五度結婚し、エリノア（Eleanor）、ブリヂット（Bridget）、エリザベス（Elizabeth）、メアリー（Mary）の四人の娘をも

第1図　トゥック家の系図（Genealogical Table of the Toke Family by E. C. Lodgeより作成）



うけたが息子がなかったので、彼の弟ヘンリー（Henry）の長男ニコラス（Sir Nicholas of Godinton, 1636—1725）を養子に迎えて、財産を譲った。[7] ともあれキャプテンと呼ばれたニコラスは、一六一六年から一六八〇年まで農業経営を行ない、現存の『帳簿』を記録した。

（1）ガヴェルカインドに関する最近の研究としては、浦本寛雄「中世イギリス・ケント地方のガヴェルカインド保有態様—C. Sandys の研究から—」（『熊本法学』第二一号、一九七三年、二九—八六ページ）がある。

（2）C. W. Chalklin, *Seventeenth-Century Kent, A Social and Economic History*, London : Longmans, 1965, p. 1.

（3）分析する史料は、E. C. Lodge (ed.), *The Account Book of a Kentish Estate, 1616—1704*(British Academy, Records of Social and Economic History, Vol. VI.), London : Oxford University Press, 1927. である。帳簿の記録は年度によって精粗の差があるので、本稿では他の期間と比較して帳簿の記録がより詳細な一六一六年から一六三〇年に至る期間に分析の範囲を限定する。なお帳簿には記録された数字の正確でない場合が屢々見られるが、編者が誤まりを指摘している場合を除き、原則として刊行史料の数字がそのまま引用される。

（4）E. C. Lodge (ed.), op. cit., p. xix and Genealogical Table of the Toke Family.

（5）E. C. Lodge (ed.), op. cit., p. xxv.

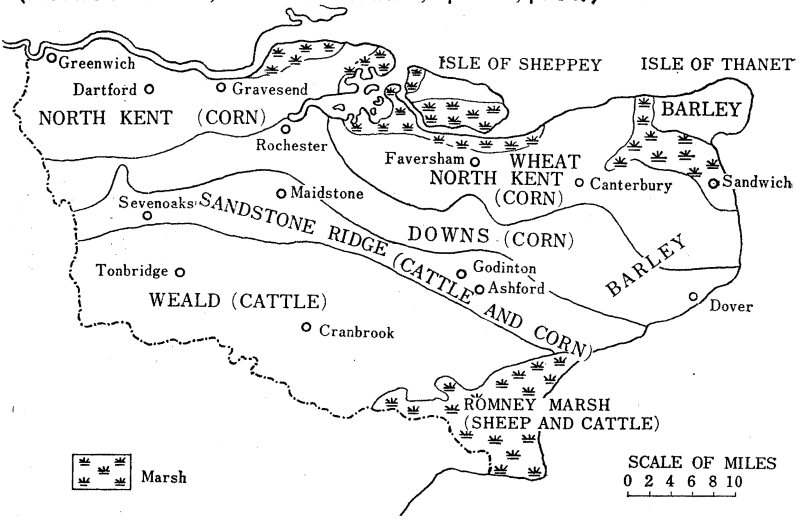
（6）E. C. Lodge (ed.), op. cit., p. xxiv.

（7）E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. xxi—xxii, and Genealogical Table of the Toke Family.

二　経営の背景

一七世紀初頭のケントはロンドンへの主要な穀物供給地として知られており、果樹栽培やホップ栽培も繁栄に向っていた。[1] また当時のケントでは、ロンドンをはじめとする市場へ販売する目的で牧畜も行なわれていた。[2] 一七世紀初頭のケントにおいては、小農（small holder）が主に自家消費のために純粋な形の混合農業を行なっていたのに対し

第2図　ケントの農業地域
(AGRICULTURE, in: C. W. Chalklin, op. cit., p. 74.)



て、中農および大農 (medium-sized and large farmer) の多くは屢々穀物生産 (corn-growing) ないし牧畜 (grazing) のいずれかに専業化する傾向を示した。[3] 中農および大農に穀物生産ないし牧畜のいずれかへの専業化を促した要因は、土壌の性質の違いであった。当時のケントは、土壌の性質の違いによってノース・ケント (North Kent)、ダウンズ (Downs)、ウィールド (Weald)、サンドストウン・リッヂ (Sandstone Ridge)、マーシュ (Marsh) の五つの農業地域に分けられる[4] (第二図参照)。

第一の農業地域であるノース・ケントは肥沃なロウム (loam) から成り、この地域では主に穀物生産が行なわれていた。[5] そしてこの地域はロンドンへの主要な穀物供給地として有名であった。[6] この地域では耕作地が全体の六七・三%を占め、他の地域と比較して耕作地の占める割合が最も高かった。[7] 放牧地の占める割合は一七・六%で、森林の占める割合は八・二%であった。そしてマーシュの占める割合は五・五%であり、牧草地の占める割合はわずか一%であった。この

地域は一経営あたりの平均耕作面積も三〇・二エイカーで最大であったが、この地域で生産された穀物については、小麦が耕作面積の四五・九％を占め最も多く、大麦が三三・二％であった。[8] 従って小麦と大麦との合計は耕作面積全体の七九・一％であった。そしてエンドウ（Peas）とソラ豆（Beans）とが一二・七％、ヤハズエンドウ（Tares）が四・三％、そして燕麦は四％であった。この地域における輪作は、小麦―大麦―休閑地ないし豆類であった。この地域における牧畜については、一経営あたりの飼育頭数は、牛が六頭で他の地域と比較して最も少なく、羊は四九頭であった。[9] これに対して馬は四頭で第二の農業地域と並んで最も多かった。[10]

第二の農業地域であるダウンズは、白亜（chalk）と粘土（clay）とから成り、この地域では第一の農業地域と同様に、主に穀物生産が行なわれていた。[11] この地域では耕作地が全体の五四・三％を占め、耕作地の占める割合は第一の農業地域に次いで高かった。[12] 森林の占める割合は二二・七％であり、放牧地の占める割合は一七・五％、牧草地の占める割合は五・三％であった。この地域で生産された穀物については、小麦が耕作面積の四三％を占め最も多く、大麦は二四・九％であった。[13] 次いで燕麦が一七％であり、エンドウとソラ豆とが七・四％、ヤハズエンドウが六・六％であった。そしてライ麦はわずか一％であった。この地域における一経営あたりの平均耕作面積は二七エイカーで、第一の農業地域に次いで大きかった。またこの地域における輪作は非常に多様であって、粘土の地帯では小麦―燕麦またはエンドウ―休閑地であり、白亜の地帯では小麦―大麦―豆類または休閑地であった。そして連作は好ましくないと考えられていた。この地域における牧畜については、一経営あたりの飼育頭数は、牛は六・五頭で少なかったが、羊は五二頭で第四の農業地域と並んで二番目に多かった。[14] また馬は四頭で第一の農業地域と並んで最も多かった。[15]

第三の農業地域であるウィールドは、重粘でそれほど肥沃でない粘土と砂（sand）とから成り、耕作が容易でなく恒常的に施肥を必要としたため、大規模な穀物生産は稀で、牛の飼育に重点が置かれていた。[16] この地域では放牧地が全体の四〇・二％、牧草地が一五・五％であって、放牧地と牧草地とを合わせると五五・七％を占めていた。[17] これに対して耕作地の占める割合は二九・五％にしかすぎなかった。そして森林の占める割合は一四・七％であった。この地域においては牛の飼育に重点が置かれていたが、ほとんどすべての農民が一―二エイカーの穀物を生産していた。この地域における穀物生産については、牛の飼料用の燕麦が主要作物であって、耕作面積の四九・七％を占めていた。[18] また小麦が三八・二％、エンドウが六・八％、ライ麦が三％であった。他方大麦は土壌の性質が不向きであったためにわずか二・四％であった。そして粘土の地帯では燕麦が唯一の土壌の性質に適合的な作物であったが、その他の地帯では小麦と燕麦との輪作が行なわれ、三―四年ごとに休閑地とされた。この地域においては牧畜は施肥の面からも重要であったが、家畜の平均飼育頭数は牛が一一頭で第五の農業地域に次いで多かった。[19] しかし羊は四八頭、馬は二・五頭で、いずれも他の地域と比較して最も少なかった。[20]

第四の農業地域であるサンドストウン・リッヂは、軽質土壌である砂岩（sandstone）から成り、この地域では混合農業が行なわれていた。[21] この地域では放牧地が全体の四三・八％、牧草地が一七・二％であって、放牧地と牧草地とを合わせると六一％を占めていた。[22] 耕作地の占める割合は三四・一％であった。森林は五・一％にすぎなかった。この地域における穀物生産については、小麦が耕作面積の三九・一％であり、土壌の性質が適合的なため大麦が三一・一％であった。[23] 従って小麦と大麦とを合わせると耕作面積の七〇・二％を占めていた。次いで燕麦が一二・八％、エンドウとソラ豆とが一一・七％、ヤハズエンドウが五・三％であった。この地域においては、一経営あたりの平均

耕作面積は一二・九エイカーで、農民の五分の三は八エイカーないしそれ以下であった。この地域における牧畜については、家畜の平均飼育頭数は牛が九頭、馬が三・五頭で五つの農業地域の中間に位置したが、羊は五二頭で第二の農業地域と並んで第五の農業地域に次いで多かった。(24)

第五の農業地域であるマーシュは肥沃な沖積土（alluvial）から成り、南部のロムニイ・マーシュ（Romney Marsh）、北部のアイル・オブ・サネット（Isle of Thanet）、アイル・オブ・シェピイ（Isle of Sheppey）、およびテムズ河岸（Thames-side）を含み、主に牧羊と牛の飼育とが行なわれていた。(25) この地域においては耕作地はわずかであって、土地の大部分は牧畜のために用いられた。この地域は高地（upland）の大農に放牧地を提供した。この地域の農民の大多数は穀物生産も行なってはいたが、小規模であった。生産された穀物については、小麦と大麦とが主な作物であり、その他に燕麦も生産された。この地域の牧畜については、一経営あたりの飼育頭数では、馬は三頭で多くないが、牛は一二頭で五つの農業地域の中で最も多かった。(26) また羊は一七一頭で他の農業地域の三倍以上であった。(27)

(1) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 3, 90, 92. F. J. Fisher, The Development of the London Food Market, 1540—1640, in : E. M. Carus-Wilson (ed.), *Essays in Economic History*, Vol. 1, London : Edward Arnold (Publishers) Ltd., 1954, pp. 136, 138—139, 141—142, 144—145. G. E. Fussell, The Traffic in Farm Produce in Seventeenth-Century England, *Agricultural History*, Vol. 20, No. 2, 1946, pp. 80, 84.

(2) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 3, 185. F. J. Fisher, op. cit., p. 140. G. E. Fussell, op. cit., p. 85. R. Trow-Smith, *A History of British Livestock Husbandry to 1700*, London : Routledge and Kegan Paul, 1957, pp. 174, 191—192.

(3) C. W. Chalklin, op. cit., p. 73.

(4) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 73—74. ちなみにサースクは、ケントをダウンズ、ウィールド、マーシュの三つの農

業地域に分類している。第一の農業地域であるダウンズは、チョークリンの分類による第一の農業地域であるノース・ケントと第二の農業地域であるダウンズとを含んでいる。この地域では主に穀物生産が行なわれ、最大の穀物は小麦で、次いで大麦または燕麦、ヤハズエンドウ、エンドウであった。この地域は土壌が浅いので施肥の必要度が高く、そのために牧羊も行なわれた。小麦はロンドンまたはイングランドの他の地方へ販売された。第二の農業地域であるウィールドは、ハイ・ウィールド(The High Weald)とロウ・ウィールド(The Low Weald)とから成り、ハイ・ウィールドはチョークリンの分類によるサンドストウン・リッヂにあたり、ロウ・ウィールドはチョークリンの分類によるウィールドにあたる。この地域は人口が稠密な地域であるが土地の多くはヒースまたはコピス(heath or coppice)で覆われており、土地の三分の一が耕作地、その他が牧草地であった。この地域の小農は牧畜に専業化していた。また耕作地の規模は小さく、通常一〇エイカー以下で、燕麦、小麦、エンドウが生産された。第三の農業地域であるマーシュは、チョークリンの分類によるマーシュと一致している。そしてロムニイ・マーシュでは、自家消費用の穀類と飼料とを生産するための必要最少限の耕作地を除き、土地の大部分は牧草地と放牧地とに利用され、羊を中心とした牧畜が行なわれた。大農は主に牧畜(fattening mutton and beef)を行なっていた。他方北部のマーシュでは、耕作地がより広範であったが、牧畜も行なわれ、この地帯はすでに一六世紀において混合農業地帯とされていた。 J. Thirsk, The Farming Regions of England, in : J. Thirsk (ed.), *The Agrarian History of England and Wales, Vol. IV. 1500—1640*, Cambridge : at the University Press, 1967, pp. 55—64.

(5) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 2, 73—74.
(6) C. W. Chalklin, op. cit., p. 3. F. J. Fisher, op. cit., p. 139. G. E. Fussell, op. cit., p. 80.
(7) C. W. Chalklin, op. cit., p. 76.
(8) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 78, 80.
(9) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 96, 100.
(10) C. W. Chalklin, op. cit., p. 104.
(11) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 2, 73—74.
(12) C. W. Chalklin, op. cit., p. 76.
(13) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 78—80.

(14) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 96—97, 100.

(15) C. W. Chalklin, op. cit., p. 104.

(16) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 2, 73—74. W. Page (ed.), *The Victoria History of the Counties of England, Kent*, Vol. 1, London : Archbald Constable & Co. Ltd., 1908, p. 458.

(17) C. W. Chalklin, op. cit., p. 76.

(18) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 77—79.

(19) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 96—98. R. Trow-Smith, op. cit., p. 192.

(20) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 100, 104.

(21) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 73—74.

(22) C. W. Chalklin, op. cit., p. 76.

(23) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 78, 81.

(24) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 96, 100—101, 104.

(25) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 2, 73—75. ちなみにロムニイ・マーシュ（ウェイルズやイングランドの辺境地方から飼育するための牛がもたらされた。またロムニイ・マーシュの豊かな (rich) 放牧地では1エイカーあたり三頭の羊を飼育できた。J. N. L. Baker, England in the seventeenth century, in : H. C. Darby (ed.), *An Historical Geography of England before A. D. 1800*, Cambridge : at the University Press, 1963 (First edition;1936, Reprinted with corrections 1948), pp. 408—409.

(26) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 96—97, 104.

(27) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 99—103.

三　『帳簿』からみた経営

a　経営地の存在形態

一六一六年一〇月にニコラス・トゥックは、父ジョンからゴディントン・エステイトの経営を任された。ニコラスが農業経営を開始するにあたって作成した財産目録は、第一表に示した通りである。[1] 経営を任されると同時にニコラスは、ゴディントン・エステイトの経営に加えて、リチャード・ナッチバル氏（Mr. Richard Knatchbull）から一、一二〇頭の羊を購入して、ナッチバル家から賃借したチェイン・コート（Cheyne Court）の二七四エイカーの土地において大規模な牧羊を開始した。[2]『帳簿』になされた地代の支払いに関する記録からトゥック家の所有地、自由保有地、ならびに賃借地は、第二表に示した通りである。まずトゥック家の所有地は、アシュフォード（Ashford）近くのゴディントン・エステイト、母アグネスに属するミルステッドならびにトングの土地から成り立っていた。次に自由保有地は、チャート（Chart）マナー、グレイト・リプトン（Great Ripton）マナー、レカルヴァー（Reculver）マナー、ウォール（Wall）マナー、およびボートン（Boughton）マナーから保有していた土地から成り立っていた。そして賃借地は叔父トゥック（R. Toke）から賃借していた土地、サー・ノートン・ナッチバル（Sir Norton Knatchbull）から賃借していたチェイン・コートの土地、タフトン（Tufton）家から賃借してい

第1表　財産目録（1616年10月）

		£	s.	d.
資産	穀物・家畜	585	1	0
	現金	80	0	0
	受取地代	51	0	0
		716	1	0
負債	債務	100	0	0
純資産		*616	11	0

(† Quit-rent, Lord's rent, Feefarm-rent)

1620—21	1623—24	1624—25	1625—26	1626—27	1627—28	1628—29	1629—30
£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.
		31 0 0					
	25 0 0						
†0 3 4	†0 3 4	†0 3 4	†0 5 7	†0 5 7	†0 5 7	†0 5 7	†0 5 7
	21 5 0	21 5 0	21 5 0	21 5 0	44 15 10	21 12 6	
		9 2 6	18 5 0	36 10 0	36 10 0	18 5 0	36 10 0
189 4 6							
	0 13 4	0 13 4	0 13 4	0 13 4	0 13 4	0 6 8	
	51 0 0	25 10 0	23 10 0	46 0 0	50 10 0	51 0 0	25 10 0
25 10 0							
	76 0 0	76 0 0	38 0 0	38 0 0	76 0 0	76 0 0	76 0 0
			†0 0 10$\frac{1}{4}$				
			†1 18 5		†3 18 8$\frac{1}{4}$	†3 18 8	†3 18 8$\frac{1}{4}$
					†0 11 6	†0 11 6	
	†0 0 5	†0 0 5	†0 0 5	†0 0 5	†0 0 5		
							†0 3 10
							†0 1 4
	6 0 0	6 0 0	6 0 0	6 0 0	6 0 0	3 0 0	
					†1 13 4	†1 13 4	†1 13 4
			†0 0 4$\frac{1}{4}$	†0 0 4$\frac{1}{4}$	†0 0 4$\frac{1}{4}$	†0 0 4$\frac{1}{4}$	†0 0 4$\frac{1}{4}$
					†1 8 4	†1 8 4	†1 8 4$\frac{1}{2}$
0 5 2							
15 0 0							
	15 0 0						
34 0 0							

第2表　トゥック家の所有地，自由保有地，ならびに賃借地：1616—1630

			1616—17	1617—18	1618—19	1619—20
			£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.
1	Godinton Farm	父 John Toke		85 0 0	85 0 0	42 10 0
2	Worting & Milsted	父 John Toke				
3	Tong	母 Agnes Toke		25 0 0	50 0 0	25 0 0
4	Bonnington		†0 3 4	†0 3 4	†0 5 7	†0 3 4
		父 John Toke		28 0 0		
		叔父 R. Toke		21 5 0	21 5 0	10 12 6
		Tufton 家				
5	Cheyne Court	Sir N. Knatchbull	327 17 0	327 17 0	378 9 1	378 9 0
6	Tennery at the Leacon	叔父 R. Toke	0 6 8	0 13 4	0 13 4	0 6 8
7	Louden, etc.	Tufton 家		12 0 8	22 9 4	9 5 0
8	Mayoes pett				7 0 0	
9	Rowbrooks				25 0 0	12 10 0
10	Coldreed and the Brooks	Dean and Chapter of Canterbury				
11	little Cheyne Court	R. Knatchbull			27 0 0	9 0 0
12	Dibbles			†0 1 0		
13	Godinton, Worting, Yardhurst, Newstreet, Four Elms, Winterlands and Bevenden	Dean and Chapter of Canterbury (Chart マナー)		†1 18 5	†1 18 5	
		Tufton 家 (Great Ripton マナー)				
14	Culverhurst and Chequers	See of Canterbury (Reculver マナー)				
15	Marl	Smyth 家 (Wall マナー)				
16	Nicholas	叔母 E. Toke				
17	Bearsland	Finch 家 (Boughton マナー)				
18	Harpe					
19	Swinford and other lands					
20	Sand head in Walland Marsh	Steeevens			0 5 2	0 10 4
21	Warehorne in Romney Marsh	Mr. Heyman				
22	Milsted	Brother-in-law Tilden 家				
23	?	John Kenward			9 8 0	
24	?	White				

た土地、カンタベリーの大主教座聖堂参事会ならびに会長(Dean and Chapter of Canterbury)から賃借していた土地、その他から成り立っていた。従ってトゥック家の所有地、自由保有地、ならびに賃借地は、前掲のチョークリンによる農業地域の分類では第三の農業地域であるウィールド、第四の農業地域であるサンドストウン・リッチ、そして第五の農業地域であるマーシュの中のロムニイ・マーシュに存在していた。(3)

第3表　受取地代

	£	s.	d.
1616—17	51	10	0
1617—18	54	8	8
1618—19	1	?	
1623—24	90	16	8
1624—25	98	19	2
1625—26	101	19	2
1626—27	2	?	
1628—29	3	?	
1629—30	4	?	

1. 現金を含めて £136.0.0
2. 現金，債権を含めて £945.0.0
3. 現金，債権を含めて£376.14.6
4. 現金を含めて £300.0.0

『帳簿』の記録からニコラスが農業を営むために用いていた土地の面積を計算することは困難であるが、第三表に示したように毎年地代を受取っていることから(4)第二表に示した土地すべてが直接経営されていたわけではなく、一部の土地は貸出されていた。第二表で注目すべき点は、一六一六年から一六三〇年に至る全期間を一六一六年から一六二一年までの期間と一六二三年以後の期間とに二分して考えてみた場合、前者の期間においてサー・ノートン・ナッチバルから賃借していた約三〇〇エイカーのチェイン・コートの土地が後者の期間においては賃借されなかったことである。この点は後に検討するように前者の期間と後者の期間とにおけるトゥック経営の性格の変化の反映である。

ところで一七世紀初頭のケントは、イングランドの諸州の中で最も広範な囲い込み地が存在していた州であった。(5)また州の東部以外ではほとんどすべての畑が囲い込まれており、当州では畑の規模は一般に小さく、殊にウィールドとサンドストウン・リッチとにおいては一〇エイカー以上の畑はほとんどなく、畑の平均面積は三—七エイカーの間で

あった。[6] このような当時のウィールドとサンドストウン・リッヂとに存在していたトゥック経営の畑は、一六二一年に作成されたゴディントン・エステイトの地図で畑が囲い込まれていたこと、[7] また『帳簿』に生垣(quickset, hedge)作りや溝掘り(ditching)に関する記録が屢々なされていることから、[8] ほとんどすべてが囲い込まれていたと考えられる。

(1) E. C. Lodge (ed.), op. cit., p. 2.

(2) チェイン・コートの賃借地は、一六一八年以後三一五エイカーに増えた。E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 1, 4, 6, 14, 21, 27, 31, 37—38, 41, 45.

(3) ちなみにサースクの農業地域の分類によれば、トゥック家の所有地、自由保有地、ならびに賃借地は、第二の農業地域であるウィールドと第三の農業地域であるマーシュとに存在していた。史料の編纂者であるロッヂもサースクと同様な農業地域の分類に従っている。E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. xviii—xix.

(4) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 9, 23, 33, 55, 69, 81, 93, 115, 124.

(5) E. C. K. Gonner, *Common Land and Inclosure*, London : Frank Cass & Co. Ltd., 1966 (First edition;London : Macmillan & Co. Ltd., 1912), D. England, Land without Common or Common Field, End of XVI Century. H. L. Gray, *English Field Systems*, London : The Merlin Press, 1969 (First edition;Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1915), pp. 272—273. E. Lamond (ed.), *A Discourse of the Common Weal of this Realm of England*, First printed in 1581 and commonly attributed to W. S., Cambridge : at the University Press, 1929 (First edition;1893), p. 49.

(6) C. W. Chalklin, op. cit., pp. 7, 10—11, 15—16.

(7) ロッヂ編纂の史料の巻末に添付されている地図参照。

(8) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. xxx, 4, 11, 14, et passim.

b　穀物生産

トゥック経営では、ゴディントン、スウィンフォード（Swinford）、ミルステッド等の畑において小麦、大麦、燕麦、および豆類の生産を行なっていた。『帳簿』からトゥック経営の畑においていかなる輪作が行なわれていたかを知ることは困難であるが、ほぼ毎年数十エイカーの畑が休閑地にされていた。[1] ともあれミクルマスにおける穀物の有高は、第四表に示した通りである。[2]

小麦は、コウルドリード（Coldreed）、クロフツ（Crofts）、ゴディントン、マードル（Mardol）、マヨウス・ペット（Mayoes pett）、スウィンフォード等の畑に作付された。小麦の作付については『帳簿』からは一六一七年に二〇エイカーの播種が行なわれたことが知られる。[3] 当時のケントにおいては小麦の収穫量は一エイカーあたり三―四クォーターであったので、[4] トゥック経営では翌一六一八年の収穫時には六〇―八〇クォーターの小麦の収穫があったと考えられる。トゥック経営では小麦は種子に用いるためのものが購入された程度であったので、ミクルマスにおける有高から計算するとトゥック経営では多い年には約六〇―八〇エイカーの小麦の作付が行なわれていたと推定される。

大麦は、ホールフィールド（Hallfield）、クロフツ、ピッグブルックス（Pigbrooks）等の畑に作付された。当時のケントにおいては大麦の収穫量は一エイカーあたり四―五クォーターであったので、[5] ミクルマスにおける有高から計算するとトゥック経営では多い年には約二〇―三〇エイカーの大麦の作付が行なわれていたと推定される。

燕麦は、コウルドリード、マヨウス・ペット、ニコラス（Nicholas）、ワーティング（Worting）等の畑に作付された。『帳簿』に記録されている燕麦の刈取り面積は、一六二五年から一六二八年までの期間には一二・五―二五エ

第4表　ミクルマスにおける穀物の有高

	小麦		大麦		燕麦		豆類	
	q. b.	£ s. d.	q. b.	£ s. d.	q. b.	£ s. d.	q. b.	£ s. d.
1617	[1]54 0	116 12 0	42 0	29 8 0	30 0	10 10 0	2 0	3 0 0
1618	38 0	66 10 0	32 0	25 12 0	38 0	19 0 0	?	10 0 0
1619	90 0	90 0 0	46 0	30 13 4	42 0	14 0 0	29 0	19 4 0
1624	[2]83 0	153 12 0	74 0	74 0 0	18 0	8 2 0	[3] ?	76 14 0
1625	[4]93 0	173 0 0	[5]124 5	91 19 0	[6]55 4	18 13 4	?	43 13 0
1626	[7]88 5	156 7 9	77 0	61 12 0	[8]96 0	38 8 0	?	34 0 0
1627	[9]290 0	409 16 8	[10]61 0	41 14 8	[11]107 0	39 0 0	?	21 15 0
1629	[12]172 5	268 0 0	59 0	59 0 0	[13]32 0	16 0 0	17 0	25 10 0
1630	[14]81 0	183 0 0	37 4	56 5 0	[15]51 0	40 6 0		

1. Wheat & Oats 20q., £12.0.0 を含む。他に20エイカー分の種子£40.0.0を含む。
2. ひね5q., £10.0.0を含む。
3. ひね4q. 6b., £2.11.9を含む。
4. ひね4q., £8.0.0を含む。
5. ひね7q. 5b., £6.2.0を含む。
6. ひね2q. 4b., £1.0.0を含む。
7. ひね8q. 5b., £16.7.9を含む。
8. ひね6q., £2.8.0を含む。
9. ひね40q., £60.0.0を含む。他に5½エイカー分の種子£16.0.0を含む。
10. ひね8q., £6.8.0を含む。
11. ひね50q., £20.0.0を含む。
12. ひね100q., 5b., £160.0.0を含む。
13. ひね10q., £5.0.0を含む。
14. ひね3q., £7.10.0を含む。
15. ひね10q., £7.10.0を含む。

第5表　小麦，大麦，燕麦の価格指数（1450—99＝100）

	小麦	大麦	燕麦
1617	647	624	616
1618	517	565	603
1619	450	493	661
1620	366	391	539
1621	598	670	730
1622	763	886	596
1623	573	648	599
1624	625	614	607
1625	637	745	768
1626	521	577	517
1627	427	443	532
1628	525	690	667
1629	609	825	741
1630	881	1,277	1,034

J. Thirsk (ed.), op. cit., pp. 820—821.

イカーであった。(6)

トゥック経営では豆類は、ヒックスフィールド(Hicksfield)、オーチャード(orchard)、スウィンフォードの畑等に作付された。豆類としては、ソラ豆、エンドウ、ヤハズエンドウがあった。(7)『帳簿』に記録されている豆類の刈取り面積は多い年でも一〇エイカー程度であった。(8)

トゥック経営では、燕麦と豆類とは家畜の飼料として主に自家消費されたと考えられるが、穀物全体として考えてみても一六一七年から一六一九年までの期間におけるよりも一六二四年以後の期間における方がより多くの生産が行なわれたと推定される。一六一七年から一六三〇年までの期間における小麦、大麦、燕麦の価格は、指数で示せば第五表の通りであり、一六一七年から一六一九年までの

期間におけるよりも一六二四年以後の期間における方が高い数字を示している。従ってトゥック経営における穀物生産の拡大を惹起した原因は、穀物価格の変動であったと考えられる。

トゥック経営では、全期間を通じて穀物の大規模な購入は行なわれなかった。他方生産された穀物のうち『帳簿』に穀物の販売に関する記録がなされている一六一七―一八年には小麦（wheat, oaty wheat）三七クォーター、大麦二九クォーター四ブッシェル、燕麦二三クォーターが、ゴディントンの自宅とアシュフォードとで販売された。(9)

それではトゥック経営においては穀物生産は、一体いかなる労働力によって行なわれたのであろうか。

トゥック経営では、労働力の担い手として定雇と臨時雇とが用いられていた。定雇については、第六表に示した通りであり、定雇は農作業全般に従事していたと考えられる。賃銀は通例半年分ずつ支払われたが、一年分に換算すると男子の場合には一―八ポンドの支払いがなされており、一―二ポンドの支払いを受けたのは少年(boy)で、成年男子の労働者の多くは四―五ポンドの支払いを受けていたと考えられる。また女子の労働者に対しては年二ポンド二シリングから三ポンドの賃銀が支払われた。次に臨時雇には、日決め賃銀で雇われる労働者と出来高賃銀で雇われる労働者とがいた。以下主な作業について検討を加えていこう。

第6表　定　　雇

	男　子	女　子	合　計
	人	人	人
1617―18	4	1	5
1618―19	5	1	6
1619―20	4	0	4
1620―21	5	1	6
1623―24	6	1	7
1624―25	9	1	10
1625―26	10	2	12
1626―27	12	2	14
1627―28	14	2	16
1628―29	17	2	19
1629―30	12	4	16

当時のケントにおいては穀物の播種の時期は地域によってわずかに異なるが、小麦は普通ミクルマスから一一月末、大麦はトゥック経営の存在したアシュフォードでは四月初めから五月半ば、燕麦は二月から三月半ばまでの間であった。[10] 播種にさきだって小麦と大麦との場合には三回、燕麦の場合には一回の犂耕を行なうのが通例であった。[11]

『帳簿』には一六一八年から一六二八年までの期間に毎年犂先（plow iron）等犂に関する支出が記録されており、[12] 一六二七年から一六三〇年までの期間のミクルマスにおける財産目録には三―六台の犂、五―七台の二輪車(cart)が見られる。[13] また一六三〇年には八頭の役畜用の馬（horses for work）も飼われていたが、全期間にわたって六―二〇頭の役畜用の牛（workers）が飼われていたことから、トゥック経営では犂の牽引には牛が用いられていたようである。[14] 従ってトゥック経営においては犂耕は、経営内の犂と牛とを用いて、通常定雇が行なっていたと考えられ、犂耕のために臨時雇が用いられることは稀であった。ともあれ犂耕が臨雇時によって行なわれた場合には一エイカーあたり四シリングから四シリング八ペンスが支払われ、大麦の播種期には一日あたり五シリングが支払われた。[15]

犂耕後小麦の播種にさきだって施肥がなされた。施肥は大麦の播種期においても、また休閑地に対しても行なわれた。肥料としては堆肥（compost）および家畜の糞（dung）がどの地域においても用いられたが、ウィールドでは泥灰土（marl）が有効な肥料であったので広範に施された。[16] またウィールドとサンドストウン・リッヂとにおいては石灰（lime）も用いられた。[17] トゥック経営では肥料として家畜の糞、石灰、泥灰土、豆類の刈株（podder gratten）等が施されたが、家畜の糞の施肥に対しては二〇ロウドあたり四ペンスが支払われた。[18]

種子は通常農民自身のものか隣人から購入したものが播かれたが、[19] トゥック経営においても種子は自己のものと隣人から購入したものとが用いられたようである。[20] 小麦の播種および耙耕（sowing and harrowing）に対しては一エ

イカーあたり一シリング四ペンスが支払われた。[21]

除草（weeding）に対しては、小麦畑では一エイカーあたり一〇シリング、一日あたり一〇ペンスから一シリングが支払われたのに対して、大麦畑では一日あたり六ペンスから一シリングが支払われた。[22]

収穫は早い地域では大麦は七月初め、小麦は七月末に始まった。[23] トゥック経営では収穫は八―九月に行なわれたようである。小麦の刈取りに対しては一エイカーあたり一シリング二ペンスから七シリングが支払われたが、四シリング六ペンス支払われるのが普通であった。[24] 大麦の刈取りに対しては一エイカーあたり一シリング一ペンスから一シリング八ペンス、大麦を束ねる作業に対しては一エイカーあたり一シリングから一シリング六ペンスが支払われ、刈取りと束ねる作業との両方に対しては一エイカーあたり三シリング四ペンスが支払われた。[25] また、燕麦の刈取りに対しては一エイカーあたり一シリングから一シリング九ペンス、束ねる作業に対しては一エイカーあたり一〇ペンスから一シリング六ペンスが支払われ、刈取りと束ねる作業との両方に対しては二シリング四ペンスが支払われた。[26] 豆類の収穫については、ヤハズエンドウの刈取りに対しては一エイカーあたり三シリング八ペンスから六シリング、ソラ豆の刈取りに対しては六シリング、そしてエンドウの刈取りに対しては四シリングが支払われた。[27] また豆類を束ねる作業に対しては一エイカーあたり八ペンスが支払われた。[28] そして積み上げた収穫物に屋根をふく作業に対しては、燕麦の場合には八シリングが支払われ、豆類の場合には一日あたり二シリングが支払われた。[29] また燕麦およびヤハズエンドウの屋根ふきに対しては一日あたり二シリング四ペンスが支払われた。[30] 脱穀・調整作業については、小麦の場合には一クォーターあたり脱穀に対して八ペンスから一シリング九ペンス、調整に対して一シリングが支払われ、大麦の場合には脱穀に対して一クォーターあたり一シリング一ペンスが支払われた。[31]

干し草作りについては、草の刈取りに対しては一エイカーあたり一シリング六ペンスから三シリング八ペンス、一日あたり一シリング二ペンスが支払われ、刈取った草を干す作業（making hay）に対しては一エイカーあたり一シリング六ペンスから二シリング四ペンス、一日あたり一一ペンスから一シリング四ペンスが支払われた。[32] そして草の刈取りおよび刈取った草を干す作業に対してはほぼ三シリング三ペンスから五シリングが支払われた。[33] また干し草の運搬に対しては一ロウドあたり七ペンスから一シリング四ペンス、一日あたり一〇ペンスが支払われた。[34]

ともあれトゥック経営において定雇ならびに臨時雇に対して支払われた賃銀は、当時のイングランドにおいては高いものであった。[35]

(1) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. xxx, 23, 55, 68—69, 81, 93, 115, 123, 495.

(2) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 8, 23, 32—33, 54—55, 68—69, 81, 93, 115, 123.

(3) E. C. Lodge (ed.), op. cit., p. 8.

(4) C. W. Chalklin, op. cit., p. 84. 小麦の収穫量は、ファッセルによれば一七世紀には一エイカーあたり平均約一五ブッシェルであり、竹内教授によれば一七世紀中葉には一エイカーあたり一二—一三ブッシェルであった。また一六一〇年から一六二〇年に至る期間のバークシャー北部に存在したロバート・ロウダー経営では、小麦の収穫量は一エイカーあたり一三・七—四九・三ブッシェルで、平均二八・七ブッシェルであった。従って一七世紀のケントにおける小麦の収穫量は非常に高いものであった。G. E. Fussell, op. cit., p. 79. 竹内幹敏「ピューリタン革命の農業＝土地問題」（山田盛太郎編『変革期における地代範疇』岩波書店、一九五六年）三一ページ参照。G. E. Fussell (ed.), *Robert Loder's Farm Accounts, 1610—1620*, Camden Third Series, Vol. LIII, London: Royal Historical Society, 1936, pp. xvii, et passim. Slicher van Bath, Robert Loder en Rienck Hemmema, *It Beaken*, XX, 1958, p. 94.

(5) C. W. Chalklin, op. cit., p. 84. ちなみにロバート・ロウダー経営では、大麦の収穫量は一エイカーあたり一八・四—三四・七ブッシェルで、平均二八・四ブッシェルであったので、ケントにおける大麦の収穫量は非常に高いものであった。

G. E. Fussell (ed.), op. cit., pp. xvii, et passim. Slicher van Bath, op. cit., p. 94.

(6) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 67, 79, 91, 104—105.

(7) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 8, 20, 23, et passim. 当時のケントでは、エンドウは二月から四月にかけて播種され、ソラ豆とエンドウとの播種量は一エイカーあたり四ブッシェルであった。C. W. Chalklin, op. cit., p. 83.

(8) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 8, 40, 47, 53, et passim.

(9) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 485—486. ちなみにウィールドとサンドストウン・リッヂとにおいては、生産された小麦の大部分は自家消費された。C. W. Chalklin, op. cit., p. 81.

(10) C. W. Chalklin, op. cit., p. 83.

(11) ダウンズにおいては、小麦を作付する場合には播種にさきだって三月から八月半ばまでの間に休閑地を三回犂耕し、大麦を作付する場合には九月から翌年の五月までの間に休閑地を三回犂耕した。C. W. Chalklin, op. cit., p. 82.

(12) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 13, 20, 25, 28, 35—36, 38, 40, et passim.

(13) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 93, 115, 123. 当時のケントで用いられた犂は重量双輪犂 (turnwrest plow with two wheels) で、かなり深く耕すことができたが、八頭の牛を必要としたので一般にはウィールドの硬い土壌において用いられた。C. W. Chalklin, op. cit., pp. 107—108.

(14) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 7, 22, 32, 42, 54, 68, 80, 92, 114, 123. ちなみに犂を牽引する役畜としての牛は一〇歳位まで用いられた。J. Thirsk, op. cit., p. 186.

(15) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 37, 50—51, 54, 103.

(16) アシュフォードにおいては一エイカーあたり一〇〇ロウドを施すのが普通であった。C. W. Chalklin, op. cit., p. 84.

(17) アシュフォードにおいては一エイカーあたり一六〇ブッシェルを施すのが普通であった。C. W. Chalklin, op. cit., p. 85.

(18) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 19, 35, 45, 59, et passim.

(19) C. W. Chalklin, op. cit., p. 82.

(20) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 45, 56, 70, 95.

の播種量は、小麦の場合には土壌の性質と播種の時期とによって異なったが二—四ブッシェル、大麦の場合には四ブッシェルであったの対して、燕麦の場合には最も多量の種子が必要とされ一エイカーあたりの播種量はアシュフォードとケント東部においては六ブッシェルであった。C. W. Chalklin, op. cit., p. 83. またトゥック経営では一六二七年から一六三〇年までの期間においては四台の馬鍬 (iron harrows) が所有されていた。E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 93, 115, 123.

(21) E. C. Lodge (ed.), op. cit., p. 51. 小麦は塩水 (brine) または石灰につけた後に播かれた。また一エイカーあたり

(22) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 18, 28, 38—39, 51—52, et passim.

(23) C. W. Chalklin, op. cit., p. 84.

(24) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 20, 29, 40, 46, et passim.

(25) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 20, 53—54, 66, 78, et passim.

(26) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 20, 30, 40, 66, et passim.

(27) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 20, 40, 47, 53, et passim.

(28) E. C. Lodge (ed.), op. cit., p. 53.

(29) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 30, 53.

(30) E. C. Lodge (ed.), op. cit., p. 91.

(31) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 12—13, 50—51, 56.

(32) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 6, 18—19, 28—29, 39—40, et passim.

(33) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 20—21, 29—30, 39, 45—46, et passim.

(34) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 17, 37, 52, 65.

(35) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. xxxiii—xxxvi.

C　牧畜・酪農

トゥック経営の中心をなす牧畜・酪農は、チェイン・コート、ゴディントン・エステイト、ボニントン (Bonning-

ton)、ウェアホーン（Warehorne）、ミルステッド等において行なわれた。

まず牧羊から検討してみよう。トゥック経営で飼われていた羊は、背の高いマーシュ・ブリード（marsh breed）と良質な羊毛のヒリッシュ・ブリード（hillish breed）とであった。[1] 羊の購入頭数は第七表に示した通りである。他方羊の販売頭数は、羊皮（skin）の形で販売された分を含めて、一六一六—一七年に一六六頭以上、一六一七—一八年に四四七頭、一六一八—一九年に六四二頭以上、そして一六一九—二〇年に三六

第7表　羊の購入頭数

1616—17	1,221頭
1617—18	497
1618—19	109
1619—20	275
1620—21	12
1624—25	114
1625—26	103
1626—27	112
1627—28	51
1628—29	60
1629—30	12

第8表　ミクルマスにおける羊の有高

	牝羊				牡羊				仔羊				合計			
	頭	£	s.	d.	頭	£	s.	d.	頭	£	s.	d.	頭	£	s.	d.
1617	704	388	4	6	496	364	4	0	417	129	15	6	1,617	882	4	0
1618	819	480	8	0	910	615	14	0	489	185	3	0	[1] 2,264	[1] 1,295	1	0
1619	835	456	13	6	770	500	18	0	561	182	6	6	2,166	1,139	18	0
1620	896	517	19	0	816	524	12	0	519	168	13	6	*2,230	1,211	4	6
1624	91	40	0	0	170	88	10	0	125	32	8	6	[2] 410	[2] 168	18	6
1625	[3] ?	[3] ?			[3] ?	[3] ?			50	15	0	0	[3,4] 271	[3,4] 139	0	0
1626	113	63	0	0	187	116	6	8	57	17	2	0	357	196	8	8
1627	168	78	0	0	159	91	13	0	134	47	18	0	461	217	11	0
1629	228	114	0	0	199	110	2	0	137	44	10	6	564	268	12	6
1630	284	138	8	0	198	109	14	0	197	64	2	0	679	312	4	0

1. 46 Wether Rigg & ewelambs を含む。
2. 24 sheep £8.0.0を含む。
3. 牝羊と牡羊との合計で，204頭，£117.4.0
4. 17 sheep，£6.16.0

七頭であった。[2] また羊毛の販売に関しては、『帳簿』には一六一七年に約一七パックを二一七ポンド一七シリングで販売した記録が見られるのみであるが、ミクルマスにおける羊毛の有高は、一六一八年に二〇パック、一六一九年に一六パック、そして一六三〇年に約七パックが記録されており、それぞれ二五六ポンド、一九二ポンド、八一ポンド二シリングに評価されている。[3] ミクルマスにおける羊の有高は、第八表に示した通りである。

第9表　羊，羊毛の価格指数
(1450—99=100)

	羊	羊　毛
1617	569	400
1618	580	428
1619	574	403
1620	452	338
1621	515	316
1622	546	267
1623	487	316
1624	557	326
1625	544	378
1626	615	377
1627	614	417
1628	615	407
1629	624	—
1630	628	393

J. Thirsk (ed.), op. cit., pp. 827—828, 845.

トゥック経営ではニコラスが経営を開始した一六一六年から一六二〇年までの期間において羊の飼育頭数が最も多かった。ところが急に羊の飼育頭数は激減して数年停滞した後、一六二七年以後羊の飼育頭数は増加の傾向を示しているが、一六一六年から一六二〇年までの期間における羊の飼育頭数には遠く及ばなかった。それではこのような羊の飼育頭数の変化を惹起した原因は何であったろうか。それは羊および羊毛の価格の変動であった。一六一七年から一六三〇年までの期間における羊および羊毛の価格は、指数で示せば第九表の通りであり、トゥック経営では一六二〇年における羊および羊毛の価格の暴落を契機として牧羊規模の大巾な縮小が行なわれたが、一六二六年以後における羊の価格、一六二七年以後における羊毛の価格の上昇と共に再び牧羊規模の拡大が行なわれた。ともあれ一六世紀中葉における平均的規模の経営の牧羊頭数が一四二

第10表　牛の購入頭数

	頭
1616—17	121
1617—18	38
1618—19	60
1619—20	121
1620—21	25
1621—22	120
1623—24	76
1624—25	49
1625—26	60
1626—27	38
1627—28	20
1628—29	32
1629—30	36

第11表　ミクルマスにおける牛の有高

	頭	£	s.	d.
1617	132	518	10	0
1618	73	350	10	0
1619	81	416	10	0
1620	135	584	16	8
1624	104	292	10	0
1625	74	276	10	0
1626	100	400	0	0
1627	104	369	5	0
1629	97	345	10	0
1630	100	383	0	0

頭であったこと、また一七世紀初頭のケントにおいて牧羊が最も盛んであったマーシュの一経営あたりの牧羊頭数が一七一頭であったことから、トゥック経営における牧羊頭数は一七世紀初頭において大規模なものであったと考えられる。(4)

次に牛については、トゥック経営ではケント（Kentish or Country）牛、チェシャー（Cheshire）牛、北部（Northern）牛、ウェイルズ（Welsh）牛が飼われていた。(5) 牛の購入頭数は第一〇表に示した通りである。他方販売頭数は、一六一六—一七年に一六頭、一六一七—一八年に牛皮（hide）の形で販売された一頭を含めて一〇一頭、一六一九—二〇年に六四頭であった。(6) そしてミクルマスにおける牛の有高

第12表　牛の価格指数
（1450—99＝100）

1617	581
1618	587
1619	555
1620	521
1621	487
1622	496
1623	514
1624	494
1625	601
1626	604
1627	593
1628	565
1629	578
1630	590

J. Thirsk (ed.), op. cit., pp. 827—828.

第13表　ミルクマスにおける乳牛，バター，チーズの有高

	乳牛	バター				チーズ			
	頭	gallons	£	s.	d.	pounds	£	s.	d.
1624	10								
1625	11								
1626	〔12〕	46	6	18	0	1,200	10	0	0
1627	14	60	10	0	0	1,600	13	6	8
1629	16	32	6	8	0	1,600	16	13	4
1630	16	48	9	12	0	2,000	20	16	8

第14表　ミクルマスにおける馬，豚の有高

	馬				豚			
	頭	£	s.	d.	頭	£	s.	d.
1617	4	13	10	0				
1618	8	25	10	0				
1619	11	41	0	0				
1620	11	51	0	0	1	2	0	0
1624	19	77	0	0	38	27	5	4
1625	24	98	0	0	49	24	7	0
1926	20	60	0	0	54	27	13	4
1627	21	73	10	0	65	32	4	0
1629	17	70	0	0	70	33	0	0
1630	19	60	0	0	51	26	17	4

は第一一表に示した通りである。

一六一七年から一六三〇年までの期間における牛の価格は、指数で示せば第一二表の通りであり、一六一七年から一六二〇年までの期間におけるよりも一六二四年以後の期間における方がやや高い数字を示しているが、トゥック経営では全期間を通じて一〇〇頭程度の牛の飼育が行なわれていた。

酪農については、第一三表に示したように一六二四年以後一〇—一六頭の乳牛が飼われており、一六二六年以後ミクルマスにバター、チーズの有高が記録されている。トゥック経営で飼われていた乳牛はチェシャー産の長角牛(Longhorns)であったと考えられる。(7)

最後にミクルマスにおける馬、豚の有高は第一四表に示した通りである。馬は一六一六—一七年に三頭、一六一七—一八年に五頭、一六一九—二〇年に三頭、一六二一—二二年に一頭、一六二四—二五年に一頭、一六二五—二六年に一頭、そして一六二九—三〇年に一頭が購入され、一六一七—一八年に二頭が販売された。(8) また豚は一六二〇—二一年に七頭、一六二五—二六年に三頭、一六二七—二八年に二〇頭、そして一六二八—二九年に一頭が購入された。(9)

それではトゥック経営は、家畜に関していかなる市場と取引関係をもっていたのであろうか。羊、牛を中心に検討してみよう。

羊および牛の購入市場は第一五表に示した通りであり、羊の購入はすべてケント内において行なわれたのに対して、牛の購入はケント内と、エセックスのブレントウッド市(Brentwood fair)、サセックスのユウハースト(Ewhurst)市、ロンドンの聖バルトロマイ(St. Bartholomew)市とにおいて行なわれた。羊の一回あたりの購入頭数は様々であったが、多い時でも五〇—一〇〇頭程度であった。また牛の購入のうちロンドンの聖バルトロマイ市での購入は一六二〇

第15表　家畜の購入市場

羊	牛	
ケント	ケント	ケント以外
Ashford	Appledore	Brentwood
Barrowhill	Ashford	Ewhurst
Bethersden	Beaver	London
Betteshanger	Bethersden	
Bonnington	Bonnington	
Brabourne	Brookland	
Brookland	Canterbury	
Chart	Charing	
Herne	Chart	
Hothfield	Chilham	
Kingsnorth	Harrietsham	
Old Romney	Hythe	
Staplehurst	Lenham	
Stowting	Lydd	
	Maidstone	
	Milkhouse	
	Mote	
	Potters corner	
	Smarden	
	Tenterden	
	Westmead	

年、一六二二年、一六二三年、一六二四年、一六二六年に大規模であった。そして一六一六年にモウトのフレッチャー(Fletcher of Mote by Canterbury)から、一六二〇年にリッド(Lydd)市において牛の大規模な購入が行なわれた。

他方羊および牛の販売市場は第一六表に示した通りであり、羊、牛共にケント内の家畜商に対して、またロンドン、サセックスのライ(Rye)、サレイのサザーク(Southwark)の家畜商に対して行なわれた。羊、牛の販売共にロンドン、サザークの家畜商に対する場合には大規模であったのに対して、ケント内の家畜商に対する場合には一般(10)

第16表　家畜の販売市場

羊		牛	
ケント	ケント以外	ケント	ケント以外
Ashford	London	Appledore	London
Canterbury	Rye	Ashford	Rye
	Southwark	Canterbury	Southwark
		Chart	
		Chislet	
		Stone Hill	

に小規模であった。(11)

また馬と豚との購入は、ケント内のチャート、ホウスフィールド（Hothfield）、プラックレイ（Pluckley）、ポッターズ・コーナー（Potters corner）、ウィレスバラ（Willesborough）において、またアップルドア（Appledore）市、チャロック（Challock）市において行なわれたが、馬の販売はロンドンの家畜商に対して行なわれた。(12)

それではトゥック経営においては、牧畜・酪農は一体いかなる労働力によって行なわれていたのであろうか。

トゥック経営ではほぼ全期間にわたって一―三名のルッカー（looker）と呼ばれる家畜の世話をする労働者が常時雇われており、ルッカーを中心にして数名の労働者が牧畜・酪農に従事していたと考えられる。(13) また羊の子取り（lambing）、洗毛、剪毛などの一時的に多くの労働力を必要とする時には臨時雇が用いられたことはもちろん、定雇が手伝った場合には定雇に対して余分な支払いがなされた。(14)

ともあれルッカーは年に一ポンド六シリングから一二ポンドまでの支払いを受けていた。(15) また子取りに対して定雇の一人は二シリング六ペンスの支払いを受けた。(16) 洗毛に対しては二〇頭あたり二ペンスから七ペンスが支払われた。(17) ま

た剪毛に対しては二〇頭あたり約九ペンスから一シリング八ペンスが支払われ、一シリングが普通であった。[18] そして洗毛および剪毛に対しては二〇頭あたり約一〇ペンスから一シリング五ペンスが支払われた。[19]

(1) E. C. Lodge (ed.), op. cit., p. 21. W. Lambarde, *A Perambulation of Kent : Conteining the Description, Hystorie, and Customes of that Shire*, Written in the Year 1570, First Published in the Year 1576, And now increased and altered from the Author's owne last Copie, London : Chatham, 1826, p. 4. R. Trow-Smith, op. cit., pp. 192—193. J. Thirsk, op. cit., p. 190.

(2) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 484—489.

(3) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 23, 32, 123, 485.

(4) M. W. Beresford, The Poll Tax and Census of Sheep, 1549 (pt. 2), *Agricultural History Review*, Vol. II, 1954, p. 25. C. W. Chalklin, op.cit., pp. 100—101.

(5) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 2, 22—24, 32, 41, 49, 54, et passim.

(6) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 484—489.

(7) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 24, 32, 41. チェシャー産の長角牛は、一六—一七世紀において乳牛ならびに肉牛の両目的のために飼われていた代表的な品種で、一日に約三ガロンの搾乳が可能であった。R. Trow-Smith, op. cit., p.211.

(8) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 3, 10, 15—16, 24, 48—49, 61, 119, 487—488.

(9) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 42, 62, 86, 104.

(10) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 484—485, 487—489. ケントのアシュフォードでは市が開かれ、ロンドンのスミスフィールドから家畜商が訪れた。C. Skeel, *The Cattle Trade between Wales and England from the Fifteenth to the Nineteenth Centuries*, Transactions of the Royal Historical Society, Fourth Series, Vol. IX, London : Offices of the Society, 1926, p. 146.

(11) ただし一六一七年と一六二〇年とにおけるアシュフォードのジョン・ナウアー (John Nower) に対する牛の販売は大規模であった。E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 484—489.

(12) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 3, 16, 24, 42, et passim.

(13) 一六一七年から一六一九年までチェイン・コートには少年を含めて四—六名の労働者が常駐して家畜の世話にあたっていた。E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 4—6, 11—14, 17—19, 26, et passim.

(14) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 5—6, 17—19, 27—29, 38—39, et passim.

(15) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 4—6, 11, 14, 17, 19, et passim.

(16) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 17, 27.

(17) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 5—6, 17—19, 27—29, 38—39, 45, et passim. 洗毛および剪毛はイングランドにおいてはどの地方でも通常六月初めから半ばにかけて行なわれ、洗毛に対しては大抵の場所で二〇頭あたり三ペンスが支払われた。しかしヘンリー・ベスト自身は二〇頭あたり二ペンス以上は支払わなかった。R. Trow-Smith, op. cit., pp. 245—246. C. B. Robinson (ed.), *Rural Economy in Yorkshire in 1641, being the Farming and Account Books of Henry Best, of Elmswell, in the East Riding of the County of York*, Surtees Society, Vol. XXXIII, Durham : Surtees Society, 1857, pp. 17—20.

(18) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 38-39, 45, et passim. 剪毛に対しては二〇頭あたり四ペンスが支払われ、その他に昼食、夕食、飲み代二—三ペンスが与えられた。C. B. Robinson (ed.), op. cit., p. 21.

(19) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 38, 45, et passim.

dむすび

以上検討を加えてきたように一六一六年から一六三〇年に至る期間におけるトゥック経営では、所有地、自由保有地、賃借地において雇傭労働力に依拠しつつ穀物生産、牧畜・酪農等が行なわれていた。一六一七年から一六三〇年までのミクルマスにおける財産目録を示せば第一七表の通りである。(1) トゥック経営が行なわれていた全期間を一六一六年から一六二〇年までの期間と一六二四年以後の期間との二つに分けて考えてみると、前者の期間においては圧倒的な比重が牧畜・酪農、なかんずく牧羊に置かれていたのに対して後者の期間においてはトゥック経営において占める

第17表　ミクルマスにおける財産目録

	1617	1618	1619	1624	1625	1626	1627	1629	1630
	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.
資産 穀物	159 10 0	121 2 0	153 17 4	312 8 0	327 5 4	290 7 9	512 6 4	368 10 0	279 11 0
家畜	1,414 4 0	1,671 1 0	1,597 8 0	565 13 10	537 17 0	684 2 0	692 10 0	717 2 6	782 1 4
現金，債権，受取為替	71 10 0	54 8 8	136 0 0	754 16 8	734 19 2	815 10 2	945 0 0	376 14 6	300 0 0
その他	104 10 0	345 0 0	311 18 0	213 6 0	277 6 6	324 18 0	222 10 8	404 13 0	388 10 8
負債 債務	1,749 14 0	2,191 11 8	2,199 3 4	1,846 4 6	1,877 8 0	2,114 17 11	2,372 7 0	1,867 0 0	1,750 3 0
	959 0 0	682 3 0	659 0 0	942 0 0	1,000 8 0	1,118 11 11	1,280 7 0	1,187 0 0	1,250 3 0
差資産	790 14 0	1,509 8 8	1,540 3 4	904 4 6	877 0 0	996 6 0	1,092 0 0	680 0 0	500 0 0

牧畜・酪農と穀物生産との比重が接近してくる。しかしながら後者の期間においてもトゥック経営は、依然として牧畜・酪農により大きな比重が置かれていた経営であったと言うことができる。ただし同じく牧畜・酪農により大きな比重が置かれていたとは言え、後者の期間におけるトゥック経営では、牧羊に代わって牛の飼育が牧畜・酪農の中心となった(2)。このような後者の期間における牧畜・酪農と穀物生産との比重の接近、牧畜・酪農に関して前者の期間における牧羊中心から後者の期間における牛の飼育中心への重点の移行はいずれも、経営の存在していた農業地域による制約を受けつつも、羊、羊毛、牛、穀物の価格の変動に対応するための経営努力の結果であったと考えられる。ともあ

れトゥック経営は牧畜・酪農に比重を置いた大規模な混合農業経営であった。(3)

トゥック経営が行なわれていた時期とほぼ同じ時期にあたる一六一〇年から一六二〇年に至る期間のバークシャー北部に存在したロバート・ロウダー経営では、経営の存在していた地域に規定されて穀物生産に比重を置いた混合農業が行なわれていた。(4) 経営者であるロウダーは牧草地の一部を灌漑して冬期の家畜飼料の確保に努めて多数の家畜の飼育を行ない、家畜の糞等の肥料を畑に施して地味を豊かにし、犂耕の回数を増やすなど穀物の収穫量を増やすための経営努力を行なっていた。そしてロウダー経営では一六一一年から一六一七年までの期間においては大麦生産に重点が置かれていたが市場価格の動きを考慮して大麦生産と小麦生産との利益を比較した上で、一六一八年以後の期間においては有利であると判断した小麦生産に重点が移された。かくしてロウダー経営は当時の上層商品生産者の典型と目されていた。(5)

ロウダー経営が所有地を基盤とし穀物生産に比重を置いた混合農業経営であったのに対してトゥック経営は所有地、自由保有地、賃借地を基盤とし牧畜・酪農に比重を置いた経営であったという性格の違いはあれ、ロウダー経営が一七世紀初頭のバークシャーを代表する上層商品生産者であったのと同じ意味においてトゥック経営は一七世紀初頭のケントを代表する上層商品生産者であったと言うことができるであろう。

(1) E. C. Lodge (ed.), op. cit., pp. 7—9, 21—23, 31—33, 54—55, 68—69, 80—81, 92—94, 114—116, 122—124.

(2) P. Bowden, Agricultural Prices, Farm Profits, and Rents, in: J. Thirsk (ed.), op. cit., p. 645.

(3) C. W. Chalklin, op. cit., p. 99. 竹内幹敏、前掲論文、三六、四二ページ、浜林正夫「イギリス絶対王政期の地主経営の諸類型」(『一橋論叢』第六十四巻第一号、昭和四十五年) 一二—一三ページ参照。

(4) 拙稿「ロバート・ロウダーの農業経営の再検討」(『社会経済史学』第三九巻第四号、昭和四十九年) 一九—二六、二九ページ

イジ参照。

(5) 竹内幹敏、前掲論文、三二―三三ページ参照。